

第三部 パネルディスカッション 「兵庫から世界へ—熱帯雨林をどう守るか—」

○高野（司会進行） それでは時間になりましたので、これより第三部「パネルディスカッション」を始めたいと思います。

テーマは「兵庫から世界へ—熱帯雨林をどう守るか—」です。

ここからはパネルディスカッションのコーディネーターをお願いしております神戸大学農学部教授、内藤親彦先生に進行をお願いしたいと思います。内藤先生、よろしくお願いいたします。

○内藤（コーディネーター） ご紹介いただきました内藤でございます。

失礼ですけれども、座らせていただいておりますを進めさせていただきたいと思います。

これまでのお話やスライドからボルネオの自然の豊かさ、あるいはその自然を守る必要性の一端がご理解いただけたのではないかと思います。ボルネオと言いますと、かつては非常に遠い場所のように思われてきました。私の小学生ぐらいのころのイメージでは、見たことのないような原色の花々が咲いて、そしておそろしい肉食動物が徘徊するような、そういうジャングルに覆われた未開の地、というようなイメージを 50 年も前の子供の頃に持っていたことを思い出します。確かにその頃は、豊かな原生林がボルネオを覆い尽くしていた時代であったのかもしれませんが。

これまでのお話の中でも言われておりましたけれども、過去 50 年間ぐらいの間に原生林の伐採が大変進んでおります。これは私たち日本という国が関わってきた大きな問題でもありますし、欧米の資本によりますアブラヤシやゴムなどのプランテーション開発、それに現地での無秩序な焼き畑、そういうものによりまして、広大な原生林が失われてきたように思われます。現在では貴重な、そして豊かな自然というのは保護区としてボルネオの一部に残され、守られているのではないのでしょうか。

今や世界は狭くなりました。その気になりましたら半日足らずでボルネオに行けますし、話の世界でしか知らなかった熱帯雨林の中に立つことだってできます。そういうことでボルネオというのが非常に身近な存在になってまいります。それでもその地へ行くには国境を越えて行かなければなりません。パスポートが要ったり、あるいは出入国の審査を受けたりというようなことがあります。

しかし、環境というものを考えると、そこには国境——海や空に日本とボルネオを区切るような障壁というのがありません。そのことはまたお互いの影響を受けるということを意味していると言えます。そのほんの一例ですけれども、熱帯雨林の減少という問題、

これは北半球の環境にも影響が及んでいきます。また、北半球の先進国における石油化学製品の燃焼も、同時に地球温暖化に関わってきたりもします。あるいは先進国の排ガスという問題がオゾン層の破壊を招いています。これが地球規模での気候への影響を与えたりもしております。従って、環境保全という問題は日本国内の問題だけではなく、地球規模で考えなければいけない時代にきているのではないかと思います。

私たち人間というのは、ここ数十年の間に、驚くほどに科学技術を進歩させてきました。そして地球環境を自在に変える力を身につけました。しかし、人間も生物の一種で、ほかの生物が生きることのできる環境でないと生きてはいけません。豊かな自然環境との共存なしに人間は生きていけない。そういうことに我々はようやく気づき始めたといえます。

地球規模での自然環境の中でも“熱帯雨林は生命の宝庫”として、かけがえのない地球の財産であるということが認識されるようになってきたと思います。

本日のシンポジウムは、サバ大学を中心とするボルネオ州の関係機関と、日本の国際協力事業団、地方自治体の兵庫県立人と自然の博物館の三者が協力して熱帯雨林の生物多様性を守っていこうとする試み、その紹介であります。

兵庫県の^{いちけんきゅうまかん}一研究機関が、これほど大きなプロジェクトのリーダー役を務めるのは極めて異例なことだと思います。このことは、地球環境保全が特別な研究者たちだけの問題ではなく、我々一人一人の身近な、しかも重要な課題として、一般市民の人たちにもよく知っていただいて、この事業が皆様の身近な問題であることを認識していただくためのシンポジウムでもあります。

今から始めますパネルディスカッションでは、「兵庫から世界へ熱帯雨林をどう守るか」という課題につきまして、ここにいらっしゃいます五名の方、それぞれの立場からご意見や提言をいただきまして、ご来場の皆様方の理解を深めていただければと思います。

この進め方ですけれども、はじめに五名のパネリストを紹介させていただきまして、そしてそれぞれにお話を伺います。それが終わりましたら、この会場の皆様方、そしてパネリストも含めて今日の課題についてお話し合っていたきたいと思います。

それでは、パネリストの方々を紹介させていただきます。

こちらから国際協力事業団森林・自然環境協力部計画課長の草野孝久さんです。

お隣は、兵庫県立人と自然の博物館主任研究員の戸田耿介さんです。

そのお隣は同じく、人と自然の博物館主任研究員の橋本佳明さんです。

そのお隣は神戸新聞社編集員の三木進さんです。

そして最後は兵庫県立コウノトリ郷公園の研究部長であります池田啓さんです。

よろしく願いいたします。

それではまず、国際協力事業団の草野さんに本事業を支援される立場からお話を伺いたいと思います。よろしくお願いいたします。

○草野 孝久（パネリスト） 草野です。どうもお暑い中をお集まりいただきまして、ありがとうございます。

JICAがどのような考えで自然保全、あるいは自然環境の保全というものに取り組んでいるのかを中心に、このサバ州との協力がどういう意味合いを持つのかというところを少しお話させていただきたいと思います。

前半のプレゼンテーションを見ていただいて、熱帯地域には非常に豊かな生物の多様性があるというようなことを認識させていただいたかと思います。また安間さんがお話になったように、希少哺乳類——希少ということはどんどん数が少なくなって絶滅の危機にあるものも含めての話ですけれども、こうした哺乳類の世界的な分布を見てみると、七割近くは開発途上国と言われている国（地域）にあるわけです。

それから、その他の植物とか動物を含めた生物多様性というものも、70%以上が同様の地域にあって、こういう地域の生息域であります森林を見てみますと、もの凄^{すこ}いスピードでこれが減少しております。五年間で6,500万haです。これを一年間で見ると、日本の3分の一ぐらいの森林が毎年消えていっているんですね。それではなぜ途上国で熱帯林、あるいは野生生物の生息域がどんどん減ってしまうのか。それは湿地や湖沼、川などがどんどん汚れていく。希少な動物の生息域が減って、生物もどんどん減ってしまう。こういう悪循環が起きているわけです。昨年度のUNEP（United Nations Environment Programme；国連環境計画）・UNESCO（United Nations Educational Scientific and Cultural Organization；国連教育科学文化機関）の地球環境概略では、途上国と先進国の経済の格差はどんどん広がっていると伝えている。途上国を中心に世界人口の3分の一ぐらいが自然資源に依存したような生活をしている。つまり、自然資源を収奪^{しゅうだつ}するような形での生活基盤しか持てないという貧困問題があるということです。

途上国と言われているところは、環境を守るための法体制とか行政、あるいは制度、組織などが非常に脆弱^{ぜいじやく}である。また、それを実行していけないような財政状態にある。さらには一般国民、政治家、行政を含めて環境に配慮するというようなものがないままに開発が進められていく。そして貧困により自然資源がどんどん減っていく。というような悪循環^{あくじゆん}に陥^{おち}っているのが多くあって、自分たちだけで自然保全をやっていくということが非常に難しい。

私どもJICAはODA（Official Development Assistance；政府開発援助）の仕事をしておりますけれども、貧しい国ほど“環境問題をやってくれ”という要望は出てきません。

いろいろな国に行くと、JICAへの要望はやはり「開発、経済が活性化するような援助をしてくれ。」というような話ばかりで、「今この資源を守っておかないと、将来大変なことになるですよ。」という話をしながら、援助事業を進めていくしかないんです。それでも“理念”というものは何かといいますと、やはり人類の生存基盤であるかけがえのない生態系を守っていこうという一つの地球規模での問題、あるいは人類全体の遺産——人類の安全保証と言っていいと思います。これをいくら言っても、途上国側の人たちには理解できないことも多いし、わかっている、それに構ってはられないという状況があるかと思うんです。やはり途上国の国民生活の向上、水準の向上とか、生活環境の安全性とか、そういったものを一緒に高めようとしてあげないと、なかなか我々のプロジェクトというものを受け入れてもらえないという状況があります。

今、生物がどんどん失われています。我々の知らないうちに消えていっているものもたくさんあると思います。今日、いろいろな先生がお話してくださいましたように、昆虫や微生物なんかも全然知らないうちに消えていっているのかもしれない。ですから早く調べて、こういうものがあるんだ、こういうものが自然の資源として人間の役に立つんだ、というようなこともわかっていかなければいけないと思います。このような調査研究も必要ですけども、これだけでは保全できませんので、どのようにして保護していくか——保護区を設立したり、それを拡大したり、持続可能に運営できるような方法を一緒に造り上げていくことが必要です。

さらに無視することができないのは、自然資源をいかに有効的に活用して持続可能なようにしていくかです。英語で“ワイズユーズ (wise use)”という言葉もありますけれども、利用の方も効率的にやる、守りながら利用できる、というような体制をつくっていくことが重要かと思っています。この三つの点をうまく組み合わせながら協力をしていきたいというふうに考えております。それで今回のサバ州でのプログラム協力というのは、このような総合的な取り組みが可能なプログラムとして、非常に期待しております。

環境というのは人間が造るものです。自然環境とよく言いますが、人間が関わらなければ自然だけでいいと思うんです。人間が関わることによって環境というものになっていって、それは我々が造るものであって、我々が壊しているものかもしれない。ですから、それは我々が守らないと自然環境というものは守れない。また、地域社会というものは非常に大事で、そこに関わってくる文化とか社会とか、そういったものを無視してはできないと思います。

それで、そこに関わる地域行政というものは非常に重要だと思うんです。単に植物とか動物だけを見ているわけにはいきませんので、そこにある人々の生活をどうするか、そう

いった意味で、私たちは地方自治体との連携というところに非常に高い期待を抱いております。

国際協力と言いますと、技術を基本から指導するというようなイメージで捉えられている方が多いかもしれません。かつては、指導に行かなきゃ協力じゃない、技術を移転する、日本の経験を相手側に与えていくというような印象が強いと思うんです。けれども、今はそういう時代ではなくて、双方向で協力して相手からも学ぶ。特に自然環境というのは国によって体系も違いますし、社会的体系も違いますので、環境の問題は一緒に考えて一緒に造り上げていく。つまり、一緒に対策を考えるということが非常に大切だと思います。

そういった意味で、サバ州で行う協力というのは逆に日本や兵庫県にとっても、経験となって返ってくる。この経験が兵庫県——国内でも非常に環境への取り組みが進んだ県だと理解しております。あるいは日本の経験となって、日本の自然を守るところでも生かされていけばいいなと考えております。

○内藤（コーディネーター） どうも、ありがとうございました。

時間の関係で、一つ一つの話については質疑応答をやめにしまして、パネリストの皆様にお話いただいたのちに、質問をお受けして討論に入りたいと思います。

それでは、人と自然の博物館の橋本さんに、この事業の基礎となる博物館とサバ大学との研究交流の紹介をお話していただきたいと思います。

○橋本 佳明（パネリスト） 草野さんのお話の中で、開発途上国と呼ばれている熱帯雨林のあるところで、「私たちが知らないうちに生き物がどんどん消えていく。」というお話がありました。これについて少し触れたいと思います。

私はアリの研究者です。以前、サバ州で高さ 40m を超える二本の木を伐り倒して、その木にどれだけのアリが棲んでいるか調査をしたところ、たった二本の木から大体 200 種類のアリが採れました。日本国内で採集できるアリは 250 種類ぐらいですから、たった二本の木から、日本に棲んでいるアリと同じぐらいの種類のアリを採取することができるわけです。だから、どれだけの生き物が熱帯に棲んでいるかというのはだれも知らないし、想像も出来ないというところが現実です。

昨年開催された、「淡路花博」で“ラフレシア”を展示いたしました。あれは直径 1 m ぐらいになりますが、その種子はゴマ粒ぐらいの大きさしかないんです。“ラフレシア”という花はブドウカズラという植物の根に種子が寄生——入り込まないと咲かないんです。そんな小さな種子をだれがブドウカズラの根に運んでいるのか、だれも知らないんです。だれも知らないうちに、どんどん熱帯雨林が消えていますから、さあ“ラフレシア”を守ろうと思っても、種子を運んでいた生き物も消えてしまっている可能性がある。消えてし

まったら、もう保全できないことになってしまいます。だから、本当に生物多様性保全をしようと思ったら、熱帯雨林のことを知る、あるいはそれを知る力というのが必要になってきます。

先ほど、内藤先生からお話がありましたように、人博は 1997 年にマレーシアのサバ大学と学術交流協定を結びました。その内容については説明したいと思います。

一つは、ボルネオ島にどんな動物や植物がいるのか、サバ大学と人博とで共同で調べましょう。二つは、調べた資料や標本がなくならないように保管するための博物館（サバ大学が建設予定）の支援を人博がやりましょう。また、たくさん採集できた標本のうち、一部を人博でも保管しましょう。三つは、こうして集めた情報をジャングル体験スクールのように現地や日本、世界の子供たちに情報を発信しよう。

この三つのキーワード、「知ること」、「収集すること」、「発信すること」を柱に、サバ大学と一緒に共同研究をおこなっていくことを 1997 年に決めました。

環境保全、生物多様性保全をおこなうためには、「知る」ということが非常に大事で、サバ大学における「知る力」の向上を人博が支援し、その過程において私たちも様々なことを「知る」ことで、人と自然の共生というものが実現できるのではないかとというのが、学術交流協定の大きな目標の一つです。

生物多様性保全をしようと思えば、応用だけでなく、つつい切り捨てられていく基礎的な部分が非常に大事なわけです。基礎研究のインフラ整備——日本でもまだ完璧にはできていません。これをサバ大学で、JICA と共同してやる。人博だけでは到底できないことを共同してやることで、ボルネオ島の人と自然の共生の実現を目指していこうと考えています。

先ほど草野さんがおっしゃっていましたが、この共同事業で得た知識を兵庫県に持ち帰って、兵庫県の自然保全に役立てるような双方向の形（協力）にできればいいのではないかと私も考えています。

○内藤（コーディネーター） ありがとうございます。

次は、人と自然の博物館の戸田さんに 1998 年から四年間、毎年博物館が主催しておられます子供たちのための「ボルネオジャングル体験スクール」、その趣旨と内容、成果などについて、お話をいただきたいと思います。よろしくお願ひします。

○戸田 耿介（パネリスト） それでは、これまでに何度か話に出てきました、「ボルネオジャングル体験スクール」の活動内容と、教育的な意味、そして、本日のテーマでもあります熱帯雨林を守るための経済的な一つの方法論としてのエコ・ツーリズムについて、お話したいと思います。

ボルネオジャングル体験スクールは、(人博の)河合館長の発案で始めたものです。私は四年ほど前に、このプログラムづくりのために現地見へ行ってまいりました。その時は現地の状況など全くわかりませんでしたので、以前、青年海外協力隊員として現地に行っておられた方に案内していただいて、関係機関などにプログラムの趣旨を説明して廻りました。

そのときの森林の状況というのが、相当伐採が進んでいて、このままでは資源を食い潰してしまうだろう、と。それで、私どもは教育的な視点で話を持っていったんですが、マレーシア側は、「子供たちが来る」、あるいは「子供たちを含めて日本人がボルネオのジャングルを体験する」ことで、経済的なメリットが出ることを期待しているのです。

私どもはプログラムの中で、その辺を^{かんあん}勘案し、二つのパターンをつくりました。

一つはいわゆる教育的な視点から、研究活動というのはどういう現場で、どういうふうに行っているかということ、子供たちに見てほしい。場合によっては、その一部を体験して欲しいということで、ダナンバレー自然保護区にありますフィールドセンターの宿舎をお借りすることにしました。そこはいわゆる研究フィールドですので、研究者の方々が数カ月から一年ぐらい、ずっと泊まり込んで調査している場所です。ですから、子供たちにとっては、かなりハードな環境で、今の子供たちから見ると相当厳しいかなという感じはしました。例えば、シャワーは水しか出ませんし、ベッドも固い木のベッド。一応網戸はありますが、あちこち破れていて虫が“ドンドン”入ってくる。このようなところで子供たちは大丈夫かなと思ったんですが、^あ敢えてここに二泊させています。そこでは、研究者の方々と同じものを食べ、施設も一部見学して実体験——昆虫を捕まえるために地面に落穴をつくるようなトラップ(罠)^{わな}を作ったり、かすみ網をかけたり、研究者がどういう方法で動植物の調査をしているか、それを一、二日ですが、体験してもらっています。

幸い、人博の場合はサバ大学との学術交流協定の中でやっておりますので、サバ大学からマリアッティ所長以下、学生、スタッフの方も同行していただいております。

もう一つは、私どもが経済的な面での^{きよ}寄与をするということですが、フィールドセンターの宿泊費が非常に安く、それだけでは地域に対するメリットというのが、大してないわけです。そこで少し離れた場所に、ジャングルをリゾート的に過ごしてもらおうという施設が造られていて、そこに二泊させています。

そのロッジは、先ほどの研究フィールドとはガラッと変わらして、いわゆるジャングルの中のリゾート地です。ここには、残念ながら日本の方々ほとんど来ていませんが、ヨーロッパの方々は一週間ぐらいの滞在でバードウォッチングなどをしに来られます。彼らはずっと鳥を見るとか、動植物を見ることを楽しみに来ておられるわけです。もちろん彼らもそこで食事をして、施設を使いますから、ある一定のお金を落とす。経済的な面で

の寄与です。こういう楽しみ方もあることを子供たちにも経験させたいということで、あえてここを選びました。

子供たちには何で環境の違うところに泊まるか説明するわけですが、理由がよくのみ込めない子供もいます。もちろん高校生ぐらいになると“ペン”とくるわけですが、小学生では、二通りに分かれるんですね。最初の虫がブンブン入ってくる場所（フィールドセンター）がよかったという子供と、絶対にああいう場所は嫌だという子供と。だからホテルみたいなお場所（リゾート・ロッジ風）の方がずっとよかったという子供もいます。このように、両方を体験してもらうことによって、違いを体感するというのも、プログラムにあえて盛り込んでいます。

数字的なことを申し上げますと、最初のフィールドセンターで、食事付き一泊 3,000 円ぐらいなんです。日本で言えばユースホテル的な施設です。後のロッジですと、食事付きで一泊二万円ぐらい。日本人の感覚でいえば、ちょっとした旅館に泊まったぐらいなんです。ただ、マレーシアの物価の水準から見れば、べらぼうに贅沢な施設です。ただ、子供たちの場合は、二人部屋のところにエキストラベッドを入れて三人部屋にするなど、いろいろな配慮をいただいで、半額ぐらいにディスカウントしてもらっています。

それでも私の計算によりますと、ロッジだけで 100 万円ぐらいの費用がかかっています。また、子供たちも結構買物をしているんですね。小さい民芸品などで大したものはないんですが、それでも子供たちは一生懸命お金を使ってくれています。私どもも買物をするんだったら、コタキナバルのお店よりも、こういったところで記念品を買った方がいいかなと思っております。

このように、教育的な視点と、エコ・ツーリズム的な経済面での寄与が、結果としてジャングルを保存しながら活用していくことになれば、我々の役割は若干果たしているのではないかと感じております。

プログラムの詳細については時間がありませんので割愛しますが、参加した子供たちのアンケートを見ると、「ジャングルの破壊が進んでいる。」「生き物がたくさんウジャウジャいると思っていたが、サッパリ見るができなかった。」とある。樹上の高いところや、夜行性の動物などは普通では見ることはできない。その道のプロの助けがないと見ることはできない。つまり、地上を“ヒョイヒョイ”飛んでいて、どこにでもいるわけではないということを感じ取っているようです。それから、「ボルネオの自然を保全するために、皆にこういう現状を知って欲しい。」と多くの子供たちが書いています。

私どもとしては、ボルネオジャングル体験スクールを国内でも非常にユニークな活動として、いかに広げていくかということが、次の課題と考えております。

○内藤（コーディネーター） どうも、ありがとうございます。

これより、スライドを使ってお話しますので、私どもは移動したいと思います。

どういのお話かをご紹介しておきますと、この次は神戸新聞の三木さんに、兵庫県民の一人として、あるいはジャーナリストの目から見た、ボルネオの熱帯雨林の印象と県民の関わりなどについて、お話いただければと思います。

そして、最後のお話は兵庫県立のコウノトリの郷公園の池田さんに、ボルネオの熱帯雨林と少し離れてしましますが、兵庫県がロシアの協力を得て、豊岡市でおこなっている生態系の復元・保全活動、これを例にしまして、国際協力活動の意義とか、あるいは兵庫県への還元について、お話をできればありがたいと思います。

それでは、お願いいたします。

○三木 進（パネリスト） 神戸新聞の三木進と申します。何で専門家ばかり出てこられたのに、突然こんな変なオッサンが出てきたかという、私の趣味は昆虫採集でして、日本中駆けまわって、カミキリムシという昆虫を採集しております。そんなこともありまして、人と自然の博物館の中西先生に、「おまえしんどい仕事ばかりして無茶やっとな。たまにはどや？」と言われたのがきっかけで、連れて行っていただいたのが、ボルネオの一番奥のジャングルでした。

大体、今までの話を聞いてはったら、生態系が豊かな森がたくさんあって、チョウやトンボや植物とかいっぱい見られて、すごいなと思ってしまいますよね。実は行き着くまでにこんな地獄があるんです。橋の上に大きい木が倒れてあって、そこに土——粘土層が掛かっている。たまたま改修していたところなんですが、ほんま、私はこの旅はここで終わらやなと思った。こんな格好でどうやって渡れというかと思ったら、何とサバ大学の大学院の偉い人が命をかけて、ここを渡ったんです。もちろん橋を渡った次の瞬間に、彼が冷や汗をかくと同時に、やったというサインで車から降りてきた。じつは、そんな危険なことがいっぱいあるんです。

これがマニアウベイスンという原生林なんです、私が行ったのは本当に奥の奥で、直径 30 kmほど、シンガポール一つが入るぐらいの火山の火口のところです。これが高いところで 2,000m、なんとこの壁が 1,000mもあるんです。そこにだけ最後の手つかずの自然が残っているというところなんです。

これが現地のコケで、ここでドクター秋山——先ほど植物の話をしてくださった秋山先生がいろいろと研究している。ここでは皆あだ名で呼ばれていまして、秋山先生なんかコケの専門だからコケマン、コケ人間と虚仮にされている人なんです。先ほど登場した橋本先生なんかは、マレーシアのイスラム社会に多いハシムという名前を通ってるんです。国

籍でも変わっているわけです。(笑)

これは6cmぐらいあるヒルなんですけど、こんなもんが山ほどおって、ジャングルの中でトイレがしたくなって、しゃがめば、あちこちからこんなのが“ビュンビュン”飛んでくるんです。ほんまです。こんなんがいっぱい血を吸うわけです。だから素晴らしいとか、美しいとかだけではないんですね。

これは熱帯生物保全研究所のマリアッティ所長の仕事部屋です。ここでボルネオの子供たちの生活や、森林・生物資源から経済的な効果を生みだして、サバ州をボルネオを豊かなどころにしたいという、所長の熱いご意見を聞かせていただきました。

私は人博の研究に参加させていただいて、単にジャーナリストとして行くだけじゃなくて、一応昆虫採集のメンバーとして行かせていただきました。会場一階に私の標本が四箱並んでいますので、帰りにでも見て行って下さい。本当に苦労して採った昆虫なんです。

こんな話を延々とけとけという、私は何ぼでもできる。普通に話しててもできるんですが、何と私に与えられたテーマは、「あんたなあ、一体ボルネオとかへったくれと言っとるけども、兵庫県民にとって、ボルネオとは何やねん。」ということ。昨日は東京で「日本にとってボルネオとは何やねん。」ということをやった。つまり、今日は兵庫県民にとって「ボルネオとは何やねん。」をもっと深められるんですね。

では、私にとってのボルネオとは何かということですが、ここで思い出されるのは、1999年6月だったんですが、ボルネオの深い原生林の中で、日本人の研究員が三、四人、サバ大学の大学院生が五、六人、広い原生林に取り残された状態になったことがあったんです。自分らの研究を終えて、皆帰っちゃってね。そんな時に人博の研究者の方々と、朝まで延々と議論をしたんです。ぬるいビールを飲みながら。そこで私が突きつけたのはこの言葉です。「人博ってどないするねん。兵庫県の人間だって、どない役に立つねん。一体どないするねん。」と。彼らは世界に出しても恥ずかしくない一流の研究者、先生方なんです。そんな先生方がボルネオで一生懸命やっとなるわけです。でも、兵庫県民はそのことをどない思うねん。少なくとも人博は兵庫県立ですから、兵庫県民として多少のことは言うても許されるかなと思って、敢えて言うたことなんです。

要するに「人博は県立の博物館で兵庫県やる。」と、「兵庫県や神戸は皆震災でやられたやんか。被災地の復興やとか、暮らしもほんまに大事や。そやけども、このボルネオのサバ州のこの研究を進めていくことかてしゃあないな。まあやりいや。言うてもらえるまでやらんとあかんのと違うか。」といった^{きゅうきょく}究極の問いだったんですけどね。

私自身もそのことをずっと考えてきて、人博の皆さんもそういうことを考えてくれてはった人もおった。それで、このシンポジウムに呼んでくださった橋本さんは、「三木さん、あんた

前にあんなこと言うてたやんか。そやから、あんたパネリストとしておいで。」と、そして本日呼んでいただいた次第なんです。

ここで私が言いたいのは、国と国の間でこういう応援（協力）が始まると、やっぱりお金に結びついて、なかなかうまいこといかんですよ。やっぱり底辺から始めないと。

今回のこんな大きなシンポジウムにまで発展した大元は何かというと、それは人博にアリの研究者のハシム（橋本）がいて、その彼がフィールドとしているサバにマリアッティ所長という、これまたアリの研究者がおった。始めは研究者同士が「おい、おもしろいな。」ということで仲よくなった。その関係の中で、研究所、大学というふうにつながって、広がっていったわけです。しかし、人博にはお金がない。人博をよう見とったら、あまり標本を買うお金もないらしい。こんなご時世だから大変なんです。そんなん、どないして、サバとやっていくのかと思ったら、どこかでうまいこと、JICAという“大きな金づる”をつかまえてきて、ここで本当に熱帯雨林を保存していこうという形につながってきたと思うんです。

だから、構図として私の一つの提案ですが、日本も（兵庫）県もいない。これからの時代は個人と個人が本当の友情で繋がっていく。本当の友情で繋がることで、お互いに誇りを持った関係で進めていけるんです。誇りを持った関係がないと、やはりうまくいかないと思います。長々すみません。

○池田 啓（パネリスト） せっかく三木さんのボルネオのお話で、盛り上がったんですけども、私は寒いロシアの話をします。

皆さんご存じでしょうか。兵庫県がコウノトリの野生化に取り組んでいることを。知らないとは言わせません。ちゃんとパンフレットを入れておきましたからご存じのはずですよ。このパンフレット裏に写真があります。昭和35年、今から40年前におばあちゃんと牛とコウノトリが30羽いたんです。それがこの10年後には一羽のコウノトリも但馬の空を飛ばなくなりました。今、それを野生に戻そうとしています。現在81羽、トキは今十数羽ですけども、コウノトリは81羽。まさに外に放そうとしています。今日は二点だけお話をします。

一つは「事件は現場で起きているんだ。」ということです。もう一つは「国際協力はどうやったらいいか。」ということをお話したいと思います。スライドをお願いします。

〔スライド（86～91 ページ参照）〕

〔スライド1〕 これがコウノトリの郷公園です。雑木林を囲って、上から下にずっと、

いずれここで飼ったコウノトリがだんだん湿地に慣れてきて、外に飛んでいくようにというイメージで造っています。この中にコウノトリが 81 羽飼われています。

〔スライド 2〕 これはハンドパペットというんですけども、こういうものを使ってエサをやって人工で育てるわけです。ここで私がお話したいのは一つだけです。コウノトリ、大型の鳥を野生に戻すというのはとても大変なことだということなんです。

かつてコウノトリは、田んぼから小川、本流にかけての「水のネットワーク」ができて、そして川の中にも繋がっていた。それがだんだん生活が変わってきて、雪の多い但馬でも川には護岸ができ、ビルが建ち、そして田んぼのネットワークがなくなって、すべてパイプで水が供給、排水されています。こういう現在の環境を、もう一度、かつてコウノトリが育っていたような環境に戻さなきゃいけない。世界で 200 を超える絶滅した野生動物のプロジェクトが行われています。例えばゴールデンライオンタマリンもそうですけれども、リハビリする場所というのはやっぱり熱帯の中です。コウノトリが難しいのはかつてコウノトリは田んぼの中で、エサをとって生活していたということです。つまり、コウノトリを野生に戻す環境をもう一度造るということは、田んぼのシステムそのものをすべて造り変えないといけない。すぐそばには人間も住んでいる。豊岡の人口が 48,000 人なんですけれども、その 48,000 人が生活様式を変えていただかないと、コウノトリは野生に戻せない、そういう非常に困難さが今あるわけです。

地域の人たちに野生復帰の意義や研究内容を理解してもらうために研究室のゼミをやるんですけども、ゼミは必ずオープン。どんな難しいゼミであっても、学校の先生であったり、県の職員であったり、あるいは地元の農業をやっておられる方、マスコミの方、とにかく月一回の研究室のゼミのときに、皆さん出てこられる。

〔スライド 3〕 もちろんもっともっと大きなところで、これは昨年やった国際シンポジウムなんですけれども、コウノトリを飼っておられる松島さん、トキを飼っておられるセンター長の近辻さん、私どもの園長の増井光子、そしてこの方はドイツのルースタット村——コウノトリを保護している村なんです。そこの村長さん。そしてこの方にはフランスのアルザスから来ていただきまして、国際シンポジウムをやった。とにかくパブリックにどんどん開いていくのが私たちの研究スタイルです。次お願いします。

〔スライド 4〕 コウノトリが野生に戻ったときに、結局四人の研究者ではどうしようもないわけです。外に放したコウノトリはどこに飛んでいくかわからない。とすると、コウノトリ・ウォッチャーが必要なわけです。そこでコウノトリのパーク・ボランティア養成ということで——昨年は 30 人だったんです。30 人の人たちに双眼鏡の使い方、双眼鏡から見るのではなく、双眼鏡を見ることによって、どういう行動を記述するのかというトレ

ーニングをする。最終的には、自分でレポートをまとめて、皆の前で五分間発表する。ここまでやると、帽子がもらえて、報告集が手に入り、そしてパスポートがもらえる。なおかつパスポートがあれば、立入禁止区域内にも入っていけるといいう、様々な特典つき。最終的にはパーク・ボランティアを100人とか200人育てないといけない。

つい一週間ほど前、兵庫県で行っているユースセミナーなんですけれども、こういうユースセミナーの子供たちもどんどん受け入れ、環境教育をやる。

こういうことばかりではなくて、様々な大学からの学生実習を受け入れるということもやっております。

さらに、研究そのものも実際にいろいろなアンケートをとりながら、「昔、コウノトリはどこにいましたかね？」というような話を一緒にやっていながら、研究そのものも開いていくスタイルをとっています。

〔スライド5〕 こうなってくると、地元の人々もどんどん変わってくる。これは地元の農業者の人たちが今やっているアイガモ稲作なんです。彼らに「おまえらコウノトリを放す放すと言ってるけれども、カエルもドジョウもおらんで、どうするんだ。」と言われながら、「じゃあアイガモ稲作を」と、彼らがやってくれている。これはオーナーたちがアイガモを放してるところなんです。

〔スライド6〕 これは毎週日曜日にコウノトリの朝市友の会が開催する「新鮮朝市」です。この近所の人たちの奥にコウノトリ郷公園があるんです。

〔スライド7〕 このように農業者がどんどん動いてくれているわけですから、とうとうJA但馬の屋根の上にもコウノトリが乗ってしまった。いずれこういう形でコウノトリが地域の中に飛来する。これが本物のコウノトリになるということを私たちはかなり期待しているわけです。

〔スライド8〕 もう一方で市民団体もすごく動いている。最近、田んぼをそのまま休耕田にするのはもったいないから、ビオトープ水田にしようという動きが農林水産省の方であるんですけども、ビオトープ水田というのは、ちゃんとある形をとらないとビオトープ水田として認めてくれない。というわけで、コウノトリ市民研究所という市民団体がこれを引き受けて、ここの田んぼを全部ビオトープ水田にしてしまう。で、子供たちを集めてきて、生き物たちをどう生かしていくかということ、私たち研究者も中に入って一緒に、どういう構造にしたらビオトープが一番よくできるかということをやっている。これが市民団体の動きの一つです。もう一つは次に紹介します。

〔スライド9〕 パーク・ボランティアの養成をやっているところに、元気な奥さんたちが「私たちも何かやりたい」ということで、「じゃあ、研究室を勝手に使ってください」

と言ったら、私の研究室からいろんなコウノトリに関する資料を引っ張りだしてきて、「いち枚の羽」というコウノトリの紙芝居を創ったんです。そして、子供たちを相手に紙芝居の上演会をどんどんやり始めました。ご希望であれば、ホームページもありますし、紙芝居を持っていきますので、ぜひとも講演を聞いてください。既に三作目になります。こういう市民団体の動きもあります。

こんな状況で行政はあまりサボるわけにはいきません。行政も頑張っています。これは豊岡にある但馬の県農林事務所なんですけれども、コウノトリを野生に戻しても巣がないだろう、巣をかけるアカマツが要るだろう、じゃあアカマツ林を造ろうとって声をかけて、60人ぐらいの市民が参加した里山づくりというボランティア事業をはじめた。でも、アカマツですよ。わかるでしょう、その心は。アカマツの下を掻くとマツタケが出てくるんですよ。マツタケを求めて60人ぐらいの人が集まってくる。このような活動がどんどん起こっています。

〔スライド 10〕 企業も参加してくれます。このスライドをご覧になっていかがですか。これが進入道路なんですけれども、ここには電柱が一本もないんです。関西電力にお話したら、いずれコウノトリが飛ぶときに、電線があつたら邪魔じやまですね。じゃあ、地下に埋めましょう。と言って、全部地下に埋めてくれた。さらに、企業が進出してきまして、豊岡市にあるカネカソーラテックというソーラーパネルの会社なんですけれども、この会社がソーラーパネルをプレゼントしてくれました。こんなふうにして一つの輪ができる。先ほどサバ州官房長が保護の話をされていて、オールセクターという表現がありました。つまり社会を構成しているあらゆるセクターが参加することによって、はじめて地域の中で動物の保護ができるということです。それが今、豊岡市では少しずつですけれども起こっているわけです。

〔スライド 11〕 これはロシアのスライドです。ロシアのボロン湖に野生のコウノトリが生息しています。今一羽飛び出していますけれども、ヒナがいます。野生のコウノトリはまだ2,000羽います。これは世界中の殆どほとんです。

現在、豊岡市にはコウノトリが81羽おります。この81羽のコウノトリというのはまだ飼育中です。兵庫県はハバロスク州と協力関係がありまして、ここの野生のコウノトリと日本の飼育中のコウノトリ、その関係をうまくもっていけば、コウノトリを増やすことができるだろうと、去年ロシアの研究者を呼んできました。今年は、コウノトリ飼育長の松島さんと当研究室助教授の大迫君がボロンに行きました。

こういう形で、少しずつでも、野生動物を保護するときに野生下で保護することは勿論ですけれども、数が減ってきたときには、飼育下とうまく連携なしがら増やしていかないといけないというのが鉄則なんです。ということで、日本では野生のコウノトリがいない。

飼育下にしかいない。でもロシアでは数が減りながらも野生のものがある。そこをうまく総合的に連携させる保護プロジェクトが少しずつ進んでいます。

〔スライド 12〕 これで最後です。こんな地図って見たことないでしょう。ロシアの方からのコウノトリの生息地で、アムール川流域、ハバロフスク、ウスリー川、ここが日本列島です。最初にお話しませんでしたけども、今いるコウノトリのうち、ハバロフスクの協力を得て6羽が飛行機で豊岡にきています。それがもとになって、現在では81羽になっている。これがロシアの環境を保全することに繋がり、もっとロシアのコウノトリの数は増えてくれると思います。いつかは豊岡市でも野生に戻す。そして、今度は飛行機じゃなくて、コウノトリが自力で、お互いの国を行き来する。これが将来の夢ですし、それが国際的な協力関係の一つの将来の姿ではないか。お互いに総合的にやるということが、一つの協力関係の姿だというふうに思います。

○内藤（コーディネーター） 五人のパネリストの皆様にお話をいただきました。

それでは、このディスカッションは五時半には終わらなければいけないので、あまり時間がございませんが、パネリストのお話だけではなくて、第一部の基調講演、そして第二部の先生方のお話を含めて、是非このことは聞いておきたいというご質問がありましたら、先にお受けしたいと思います。どなたか、ご質問はございますか。何でも結構ですので、気楽にお手を挙げていただきたいと思います。特にございませんか。

それでは、私どもパネリストを中心にしまして、今日のテーマの「兵庫から世界へー熱帯雨林をどう守るかー」ということについて、二、三話しをしていきたいと思います。

まず、この大きな事業としての部分です。県民の皆さんにこういうことをやっている、あるいはこれからやります、ということを含めて、ボルネオの熱帯雨林というのがいかに貴重なものであるか、あるいはその保全をしなければいけない重要性ということを、どのようにして皆さんに知らせていくか。つまり、一体何が大事で、我々に直接何が関係するのかという情報が必要になるかと思えます。例えば、小・中・高校生向けのジャングル体験スクールを通じて、一般の人たちがそういうことを知るとか、あるいは体験できるという情報をどうやって発信をしていくか。このようなことについて何かご意見はございますでしょうか。皆様からのご意見でも結構でございますが。

それでは、戸田さんにお聞きしますが、ジャングル体験スクールをやっておられますが、これをもう少し一般向けのエコ・ツーリズムに広げていくとか、そのようなお考えあるのでしょうか。

○戸田 もちろんです。第一回のときから、大人向けのはやっていませんが、というお尋ねは非常に多いわけです。これまでは「いずれは」という言葉で濁していたわけですが、

勿論、マレーシア側も日本というか、兵庫県民が相当数来るのを期待しているわけです。そういう仕組みを造る必要はあると思うんですが、今までは子供たちを連れていく。これには教育的な意図があるわけで、私どもの博物館の使命として、相当エネルギーを使って、あるいは県の予算を使ってやっているわけです。

それを今度は一般の方に向けてやるという場合、少し違う仕組みが要るだろうと考えています。勿論、「学び」という要素は多いわけですが、少なくとも、私ども館員が何かお世話をするというのは、当然限界があります。まだアイデア段階ではありますが、こういうものを広めていける方、いわゆるリーダー的な方を少しずつ増やしていくしかないだろうと考えています。

現段階では子供たちまでで、それ以上になると、学校の先生、あるいはNGOのリーダー的な方に、まず現地を知っていただき、いろんなノウハウ——私どもジャングル体験スクールでおこなった各種プログラムのノウハウがあります。そういうものを学びとって、それをまた広げていただくという方法も一つありかなと思っています。

○内藤（コーディネーター） ありがとうございます。

○草野 意見を言っていていいですか。

○内藤（コーディネーター） はい、どうぞ。

○草野 現地の地域社会を巻き込んでいくということを考えながら、この活動に関わっていくと、それなりに自分たちの生計とか経済主観が生まれてくる。サバ州というのは、かつて木材を輸出して経済を成り立たせ潤ったところ^{うるお}です。その木材を一番買ったのは多分日本で、我々は非常にお世話になっております。今ではそれがアブラヤシにとって変わっている。森林を伐り倒してパームオイルを売っている。そうすることで生態が壊れているわけです。

現在ではサバ州の収入の第二位は観光です。すなわち、自然を見に行く。けれども、生態系を大事にするようなものではなくて、自然と親しむ、自然を利用する、ひよっとすると自然を壊してしまうエコ・ツアーが多い。さらに、ここに現地の大きな企業が関わってくると、現地の住民にお金が落ちていかない仕組みになってしまう。

こういうジャングル・ツアーのようなものが一般に広まって、やさしいエコ・ツアーをやって、日本人がそこでお金を落とす。そんなにたくさんのお金を落とす必要はないと思います。それによって、地域社会が潤うようなメカニズム^{うま}というのができる就非常面白と思うんです。さらに、我々がこのプログラムの中で、現地のNGOを育てることができたら、NGOが地域住民と一緒に自然を守るような活動を活性化していきたいと思っております。ただ、NGOが成り立っていくためには常に収入がなければならぬ。

それを我々 J I C A、あるいは O D A の金でやれるかというところではできません。これをやってしまうと持続しません。我々が引き揚げた後に必ず潰れてしまいます。けれど、日本からの観光客がお金を落としていけば、各地域の住民も生計が成り立つし、自然を壊さなくても済むようなメカニズムができると思います。どなたか旅行会社の人はこの会場に来ていませんか。(笑)

○内藤 (コーディネーター) 三木さんどうぞ。

○三木 日本のエコ・ツーリズム事情ですが、大手が三社ほどあるそうです。では、どのように行われているか。じつは私もびっくりしたんですが、去年の淡路花博のときに、中国の植物を持ってこられた M さんに話を聞いたんですが、15 人ぐらいの中老年層ばかり集めて、中国や世界のあちこちにその地域の専門家をリーダーとして行くエコ・ツーリズムがかなりあるらしく、凄く流行っているらしいんです。

私は近いうちに、そのレポートを記事にしようかと思っているんですけども、「一体こんなところ、どうやって入れたんやろな？」というところまで行っている。すばらしい中老年パワーですね。だから、草野さんがおっしゃった、「本当に環境を破壊しないように、金だけ落として、そしてちゃんと環境を守っていく。」というのは本当に大事だと思います。

○池田 コウノトリの郷公園は、ご存じのように山陰にあります。城崎温泉のちょっと手前の豊岡市です。公園内には、研究施設と簡単なちょっとした展示施設しかありません。それにも拘わらず、冬になると“カニカニ・ツアー”の 30 分のトイレ休憩だけで、昨年 6 月のオープン以来、既に 16 万人の人が来ています。でもそれはマス・ツーリズムなんですね。マス・ツーリズムであろうと、16 万人が「おお、コウノトリはこんなにでかいんだ」と言う。一応屋根なしのところではコウノトリを飼っていますので、「昔はこれだけいたんだ、飛んだら凄くいだろうね。」と口々に言う。

概念としてマス・ツーリズムに対してオルタナティブ・ツーリズム。ソフト・ツーリズムに対してハード・ツーリズム。そのパターンの中にエコ・ツーリズムがあったり、グリーン・ツーリズムがあったり、カルチュラル・ツーリズムがあったりするわけです。でもポイントは草野さんが言われたとおり、現場がどれだけしっかりしたものを用意できるかということにかかっている。多分、すごく手前味噌な話をすると、今ここで議論されている J I C A と人博のボルネオ共同プロジェクトでどれだけの実績を残すかによって、持続可能なツーリズムに、あるいはオルタナティブなツーリズムに結びついていくのではないかなという印象を持っています。

○内藤 (コーディネーター) ありがとうございます。何か会場の方からご意見などございますか。

○A氏 Aと申しますが、プログラム協力についての質問なんですけれども、人博の研究者の方々が、ボルネオの生物多様性保全の、ある意味、政策に繋がるような関わり方をされるというのは、非常にユニークな試みであると思います。そういう意味で、環境問題は研究と政策をうまくドッキングさせるというのが、非常に重要ではないかと考えています。

温暖化対策というのもそうですし、生態系ではミレニアム・エコシステム・アセスメントという大規模な取り組みが今年度から始まっております。そういう意味で、特にこのボルネオの生態系保全について人博の研究と、現地での保全対策、これをどのように繋げていくのか、その辺のお考えを聞かせていただきたい。

○内藤（コーディネーター） では、ムスタファ官房長に、研究と行政の関わりというか、連携について伺いたいと思います。通訳もお願いします。

○ムスタファ・サバ州政府官房長（訳） 今のご質問をしっかりと私が承ったかどうか、はっきりわからないんですが、わかる限りでご説明申し上げたいと思います。

まず、政策についてですが、このプログラム協元に計画段階から関わっているのは、国レベルの話ですので、マレーシア国と日本ということになります。サバ州というのは皆様ご存じのように、兵庫県のような一つの県、一つの州ですので、今でも計画の段階においては国レベルのものとされております。

しかし、実際に実施の段階になりますと、当然州レベルでなければならない。そのためにも私は作業部会を持っており、先ほどのお話にも出ましたが、研究だけでなく、全ての構成要素に関わっているのです。

私は州政府におけるプロジェクトの中心としてJICAの方々にも大きく関わっておりますので、関係機関の全てが一丸となり協力して、このプロジェクトが成功するように努力したい思います。

○内藤（コーディネーター） ムスタファ官房長、ありがとうございました。

○草野 少し補足したいと思います。

我々JICAはこれまでに三回の調査団を派遣して、マレーシア側と一緒に計画造りを進めているわけです。JICAではこういうものの進め方というか姿勢を、「オーナーシップ」という言い方をします。あくまで、この事業の主体はサバ州なんですね。今回、齋藤（JICA）が説明しました計画というのも、マレーシア側の関係者、NGOや地域の住民代表も入った参加型のワークショップを、何回も何回も、延べにして百数十人ぐらいが参加してできあがった基本的な計画に、我々が専門的なアドバイスをしながら、今回のプログラム協力計画ができあがっている。今も三人が現地に入っていて、このプログラムをどうしていくか、どのようにしたら成功するか、マレーシア側の意見を吸いあげながら造

っているところです。

ですから、計画を造ってマレイシア側に差し上げるようなことではなくて、関係する人たち皆で、こういう事をする必要がある、というところを取りまとめて計画ができ上がっているということをご理解いただければと思います。

○内藤（コーディネーター） ありがとうございます。

もう所定の時間が過ぎていきますので、中途半端ですみませんが、ディスカッションをこの辺で終わらせていただこうと思います。最初にも申しましたように、私たちの科学技術の進歩が、結局のところ環境問題を引き起こしたわけです。

しかしながら、人間活動というのが、生物や我々人間の生存を危ぶむような状況に追い込んでいくんだということを、最近ようやく認識し始めたわけです。我々生き物の中で未来が予測できるというのはおそらく人間だけだと思うんです。しかし、我々は非常に欲深い生き物ですから、私欲しやくというものが入ってきて、未来に対して正しい判断を下せない、というのが現状ではないかと思います。

また、科学技術の進歩に比べますと、人間の心とか体というのは、さほど早いスピードでは進歩できない、非常にアンバランスなところがあるんじゃないかと思います。しかし、神戸が経験しました、あの大地震の直後は、損得そんとくを超えたボランティア活動というのが非常に活発になったことがあります。このような力が環境保全問題にも損得そんとくを超えて向けられるときが来ることを期待したいと思います。

今回のような、地方自治体の一研究機関いちけんきゅうきかんの地球環境保全への取り組みから、熱帯雨林への関心が高まってきて、環境問題が県民の身近な課題として捉えられ、身の回りの環境への関心の引き金となればと思います。これからは、我々一人一人が環境問題を真剣に考えていかなければならないと思いますし、私たち自身も未来のあり方について、意見を持つ時期に来ているのではないかと、そして、このシンポジウムがそういうきっかけになればありがたいと思います。

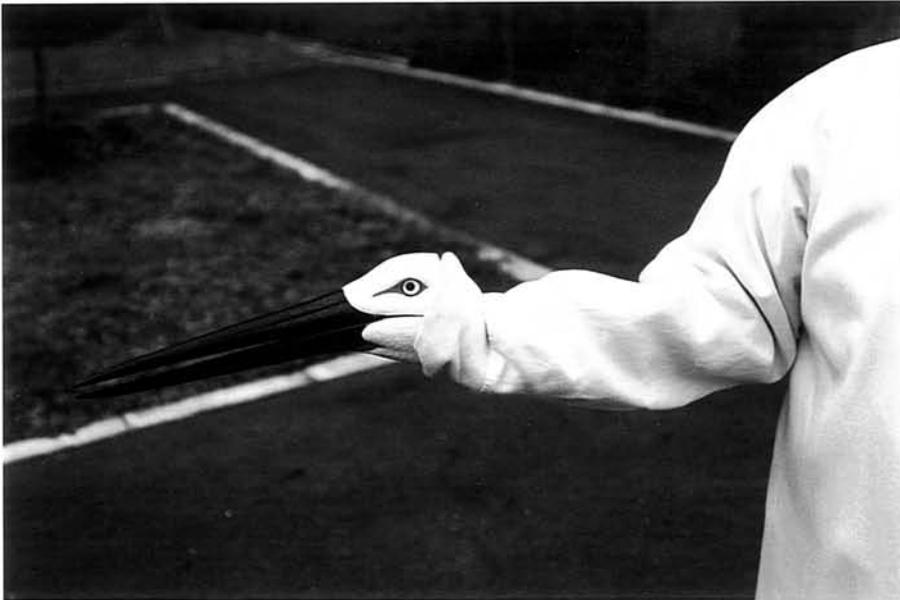
最後に、JICAや人博が支援する本事業が成功して、地球規模での環境保全がより鮮明になることを期待しますとともに、県民の皆さんにおかれましても、関心とご支援をよろしくお願ひしたいと思います。

どうも、ご清聴せいちょうありがとうございました。（拍手）

発表スライド (池田啓)



[スライド1]



[スライド2]



[スライド3]



[スライド4]



[スライド5]



[スライド6]



[スライド7]



[スライド8]



[スライド9]



[スライド10]



[スライド 11]



[スライド 12]

総括

「地球環境問題の解決に向けた地域の国際協力」

—辻井 博（兵庫県産業労働部国際局長）—

○高野（司会進行） それでは、本シンポジウムの総括といたしまして、兵庫県国際局長の辻井博様より、「地球環境問題の解決に向けた地域の国際協力」について、ご講演を賜ります。よろしくお願いいたします。

○辻井 皆様、お疲れ様でした。時間が遅れておりますのに、まだこの上、何か喋るのかということで、登場いたしまして失礼いたします。

じつは、総括ということで、とても私には無理なのでお断りしたわけですが、こちらにおられます河合雅雄先生とは、13、4年来のお付き合いで、そのころ「丹波の森構想」というのを私が担当しておりました。そこに丹波の森大学というのを造りまして、この学長に是非とも就任して欲しいと何度もお願いしまして、それ以来、私の師匠であります。この先生から直接、「おまえも何かコメントをせえよ。」ということで命令を受けましたので、私の能力も省みず、皆様方をもう10分ほど、しんどい目に煩わすことになりました。

せっかくの機会をいただきましたので、そこでお話を聞いていまして、三つほど感じたことを述べさせていただきたいと思います。

一つ目は、このシンポジウムについてのコメントです。二つ目は、この“生物多様性保全プログラムの重要性”といったこと。それから三つ目が“地域の国際協力の今後の展開に向けて”といったことについて、簡単にお話させていただきたいと思います。

まず、本日のシンポジウムについてであります。内藤先生（パネルディスカッション・コーディネーター）も言われましたように、それから皆様もよくご存じのように、20世紀は自然との対立、戦う世紀であって、21世紀は自然と共生を含めて環境の世紀だと言われております。これは20世紀の初めに地球人口が16億人、これが20世紀の100年間だけで4倍の60億人に膨張したのですから、当然のことであると言われております。

今や地球環境は国境を越えてグローバル・イシュー（Global Issues）となっています。このような議論をしますと、常に概念的な議論で終わってしまうのですが、今回の国際協力公開シンポジウムのすばらしいところは、一切、概念的議論がなかったことだと思います。具体的には、次の三点について強く感じました。

一点は地域といいますか、言いかえればフィールドに根ざしたものであるということでございます。河合先生には、ジャングルがいかに人間にとって、この熱帯雨林が人間の原郷“ふるさと”であるかということをお話いただきました。それから、「ボルネオ島の

ふしぎな生き物の世界」ということで三人の先生方に、言葉を通じてでありますけれども、我々に熱帯雨林を体験、実感させていただきました。

二点目は、人と人との信頼に基づく国際的な連携の実績を基本にしているということでございます。ご挨拶いただきましたサバ大学のノー副学長と、人と自然の博物館の河合館長との“絆”であります。それから、過去四年間の学術交流協定に基づいて研究に携わられた先生方との友情であります。三木先生はアリとアリの研究者の深い友情でもあると言われていました。県立西脇工業高校の河瀬麻希さんが代表して発表くださいました、ラハダトゥ・サイエンス・スクールの皆様方との交流にしても、“ジャングル（熱帯雨林）の中で泳いだり”という体験から基づく連帯感でもあります。

三点目は、ちょっと適切な言葉が浮かばなかったので、うまく表現できるかどうかわかりませんが、本物志向といえますか、個人の体験、感性、感動、そして連帯感といえますか、共感、そういったことで、環境問題で一番大きな課題であります環境教育につきましても、教育などと肩ひじを張らずに、自然と自ずから湧き出るような大きな成果を上げていることとございます。

そしてパネルディスカッションでは、これら三点を基礎といたしまして、熱帯雨林に対して具体的に何ができるかということで、パネリストの皆様方は少し時間が足らなかった感じで、ちょっと消化不良感も知れませんが、内藤先生に“欲深い人間と有限の地球”ということでまとめていただきましたので、この点は省略させていただきます。

二つ目は、このシンポジウムを契機に、これから進められる“生物多様性保全プログラムの重要性”についてであります。正確には「マレーシア国サバ州生物多様性保全プログラム協力」という非常に長い名前のプロジェクトでございますが、この名前がこれからシンボルになる。後ほど理由を言いたいと思いますが、もう少し簡単なネーミングにした方が良いでしょう。まあ時間も押しておりますので、ちょっと私のまとめが合っているかわかりませんが、このプロジェクトの意義はこういうことではないかと先ほどから考えておりました。様々な機関が国際的に連携して、しかも地域の人々と自然との関わりを基に、人的ネットワークの元に進められる連携プロジェクトであるということとございます。

これに関係いたしまして、三点ほどコメントさせていただきますと、JICAを初めとして、環境問題の国際的な取り組みは従来、国と国との関係で行われてきました。しかし地域施策として、環境保全分野では地域にノウハウと人材がございますし、これらのネットワークの元に、地域に即した課題解決と申しますか、そういった点に寄与できるのではないかと思います。

二点目はサバ州の自然公園でのフィールド整備、それから研究宿泊施設の整備といったこともご紹介されておりましたが、サバの地域活性化として、グリーン・ツーリズムとか様々な概念が出てきました。観光でもよろしいですし、エコ・ツーリズムということになったらもっとすばらしいと思うのです。そうすると、この地域にとって単に環境だけでなく、地域の活性化にも寄与いたしますし、エコ・ツーリズムの拠点となり、一方ではジャングル体験などといった環境教育プログラムの充実も図ることのできる、大変得難い環境教育の場となるものでもございます。

それから、三点目に感じたことですが、おそらくこういうことを言うと J I C A に怒られるかも知れませんが、今後はこういうプロジェクトに O D A は使われていくようになるのではないかと。O D A の大半はこういう“手間”と“暇”と“地域”という非常に難しいものが対象になってきます。単に相手国とインフラ——ダム等を造るだけでなく、地域政府、地域の人々、N G O、N P O、グループといいますが、こういった方々とネットワークを組んでやっていく事業、こういったものにおそらく重点化していくのではないかと、私は期待を込めて思っております。

それから一つだけお願いを申しますと、人博も今まで自由な感性とかを大事にしてきましたが、国のお金が何億と入りますと、簡単なことも難しくなるのではないかと、このようなことにならないように、是非とも J I C A さんをお願いしたいと思います。そういうことはないと思いますが…。

最後は“地域の国際協力の今後の展開に向けて”ということです。私は現在、国際局を担当しておりますが、三つのことで“やっぱり兵庫はどこも国際的だ”と言っており、これは大事にしていかなければならないと思っております。

一つ目はこの兵庫というところは、130年ほど前に開港して以来、日本の窓口であったわけです。例えばカナディアン・スクールとか国際学校が19校もあつたり、様々な教会があつたり、私は財産と呼んでいますけれども、大きな国際的な財産を有しています。こんなところは東京以外にありません。さらに神戸東部新都心を中心として、J I C A 兵庫国際センターをはじめ、W H O 神戸センター（「世界保健機関(W H O)健康開発総合研究センター」の略）、A P N センター、それから最近では国際連合人道問題調整事務所(O C H A)アジアユニット、こういった様々な環境や健康、防災などの分野を中心として国際機関が集積しております。この新しい財産をさらに活用して、国際性というものを大事にした地域づくりをしていきたいと思っております。

二つ目は、先ほど少し話が出ていましたが、私たちは阪神・淡路大震災から六年半が過ぎようとしていますが、世界中から支援と励ましを受けて復興しつつあるわけでござい

す。そういった意味でも、私たちは国際性をどこよりも大事にしなければならないでしょう。

三つ目、これが一番大事なことだと思います。今日のパネリストの先生方、ここにお集まりいただいた皆様方、共生志向の県民性——私が勝手に思い込んでいる節もあるのかもわかりませんが、阪神・淡路大震災のときに、外国人県民と日本人県民が一緒になって避難生活をしたことで、世界中から私たちは称賛を受けました。こういう“ハイカラ”というか、“海外が好き”というか、共生を志向する県民性があると思っています。人だけでなく機関もそうです、人博もそうでございます。このようなことから、国際性を大事にしていかなければと思っています。

このような兵庫県でありますので、先ほどの新しい財産、それから人博も含めて地域の直面する環境、健康、防災、こういった共通の課題を解決することによって——前知事はこう言っておりました、「平和の技術」と。私たちは武力による平和ということではなく、平和の技術発信拠点として兵庫県を、人博の皆様方、それから国の関係機関を中心に、地域が持つ技術やノウハウを平和の技術として国際貢献に役立ていきたいと思っています。

そういった意味で、今回のシンポジウム、それから新たに着手されます生物多様性保全プロジェクトが、この平和の、兵庫の技術発信拠点の先導的な役割を果たすプロジェクトとなりますことを期待しまして、私の総括とさせていただきます。

非常に拙い総括ではございましたが、どうもおつき合いいただきましてありがとうございます。（拍手）

○高野（司会進行） 辻井様、どうも、ありがとうございました。これで、すべてのプログラムを終了いたしました。長時間にもかかわらず、多くの方々に最後までご参加いただき、どうもありがとうございました。

それでは以上をもちまして、『「ボルネオ生物多様性保全」国際協力公開シンポジウム』を閉会とさせていただきます。本日は、本当にありがとうございました。

なお、アンケートをご協力いただいた方、出口の方で回収いたしておりますので、よろしく願いいたします。

——了——

参加者アンケート集計

本シンポジウムに参加いただいた方々にアンケートの協力をいただきました。

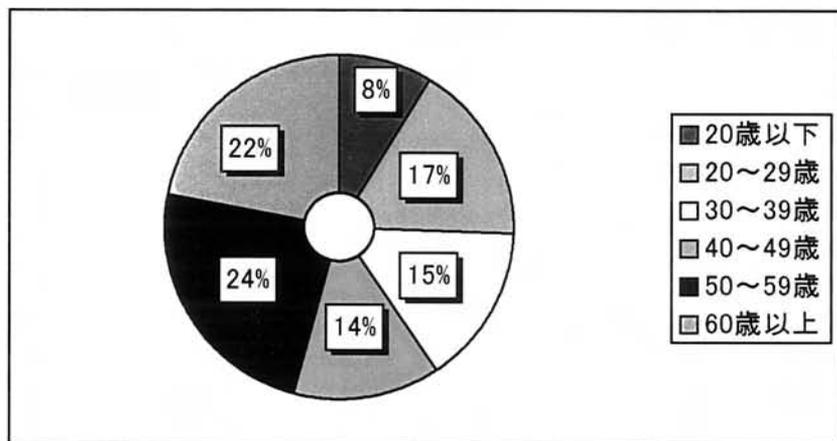
アンケートの内容および結果は以下のとおりです。

I. 参加者数	283名
II. アンケート回答者数	59名
III. 回答率	20.85%

1. あなたの属性を教えてください。

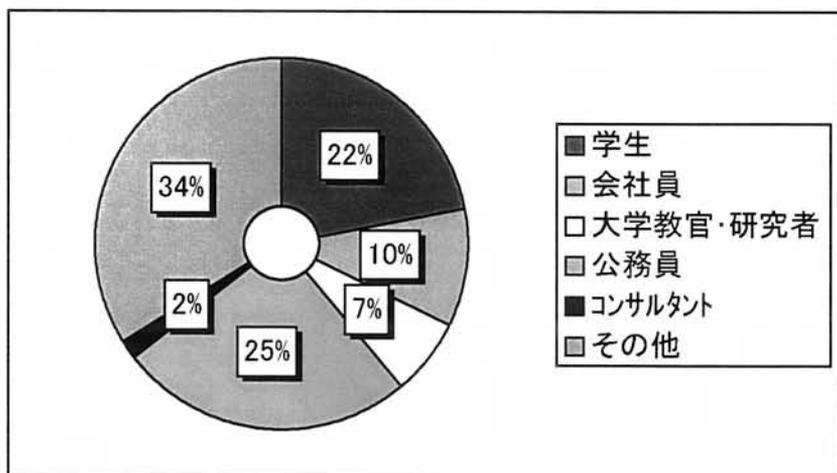
〔年齢〕

20歳以下	21～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60歳以上	合計
5	10	9	8	14	13	59



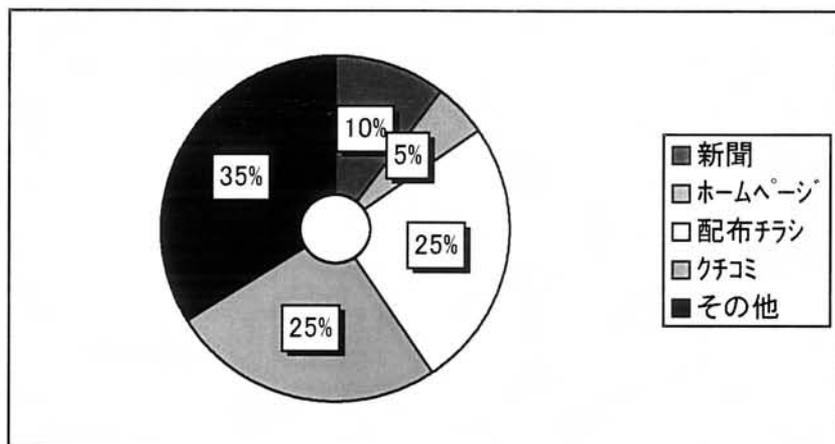
〔職業〕

学生	会社員	大学教官・研究者	公務員	コンサルタント	その他	合計
13	6	4	15	1	20	59



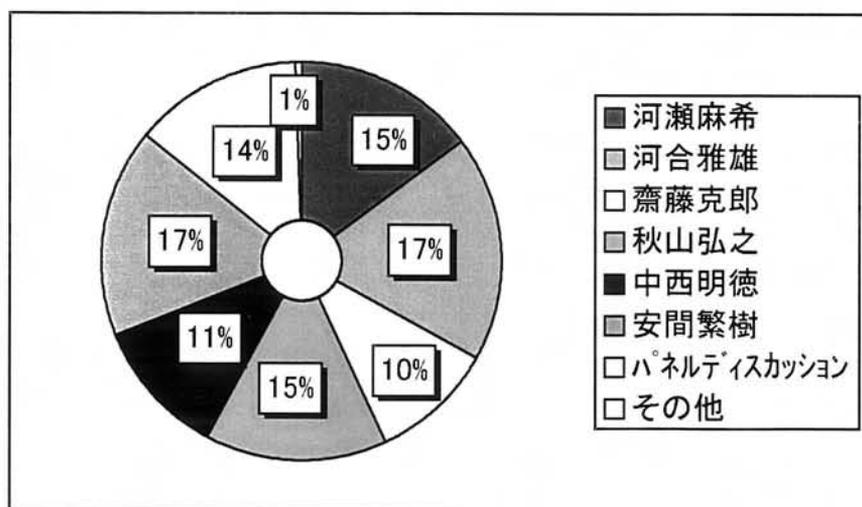
2. 今回の講座を何で知りましたか？

新聞	JICA ホームページ	配布チラシ	知人・友人 からのクチコミ	その他	合計
6	3	15	15	20	59



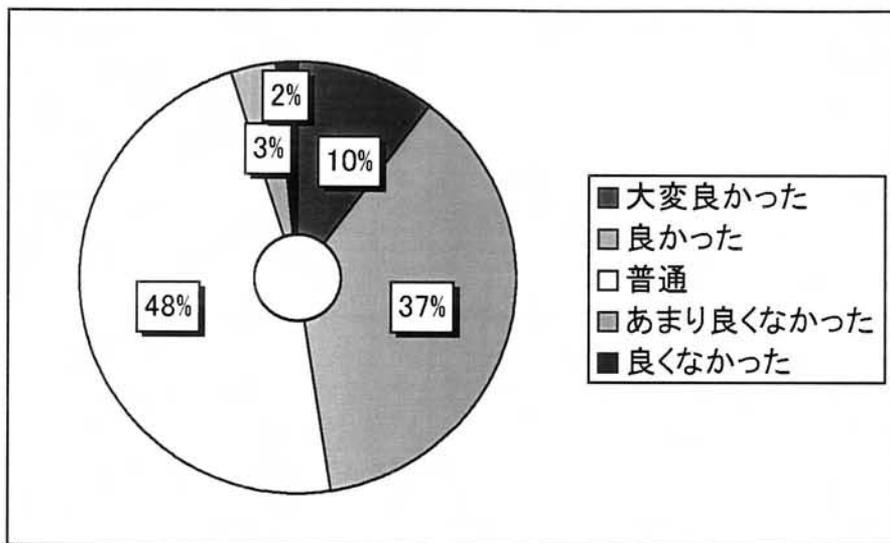
3. 今回のシンポジウムで面白かったのは？（複数回答あり）

28	「オランウータンの森を守ってー私たちが熱帯雨林で体験したことー」(河瀬麻希)
35	「人類の原郷ー熱帯雨林ー」(河合雅雄)
19	「マレーシア国サバ州生物多様性保全プログラム協力」(齋藤克郎)
28	「ボルネオ島の奇妙な植物の世界」(秋山弘之)
21	「ボルネオ島の魅惑的な蝶たちの世界」(中西明德)
32	「ボルネオ島の謎に満ちたほ乳類の世界」(安間繁樹)
26	パネルディスカッション
1	その他
190	合計



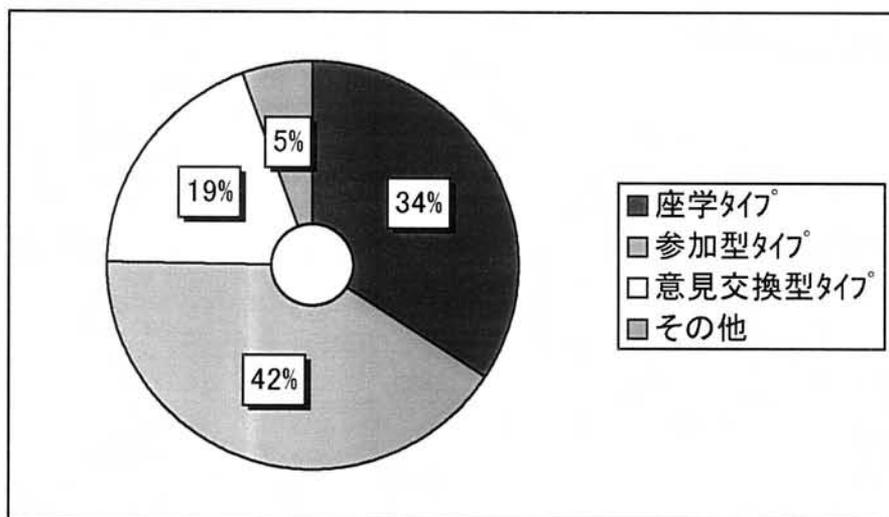
4. シンポジウムの進め方はいかがでしたか？

大変良かった	良かった	普通	あまり良くなかった	良くなかった	合計
6	22	28	2	1	59



5. 今後どのような催し物、講座に参加してみたいですか？（複数回答あり）

座学タイプ° (講座・講演)	参加型タイプ° (実習・実技研修)	意見交換型タイプ° (ワークショップ)	その他	合計
25	30	14	4	73



6. あなたがボルネオ保全のために必要だと思うことや、JICAへの要望・意見など自由にご記入ください。

①参加者がこれまで取り組んできた、今後取り組んでいきたい事由

- ・今回の話を聞いて是非ともボルネオの調査に行ってみたくなった。
- ・1997年不慮の事故で亡くなられた井上民二先生の本の影響から熱帯雨林の様々な講演に参加している。
- ・棚田保全、里山整備などを集落単位で実施している。
- ・マレーシアの多様性をテーマにて大学院で研究している。その関係で一年ほどマレーシアに滞在していた。
- ・今回の話を参考に学校教育の中で活かしていきたい。
- ・オランウータンの精子の冷凍保存研究をおこなっている。
- ・自然環境を人間活動により悪化させてしまったのだから、何らかの形で貢献していきたい。
- ・計画性のない開発によって遺跡のような形でしか原生林が残らないのかと思うと、今のうちに何か打つ手はないものか焦りにも似た思いに駆られる。

②参加者からのJICA側への要望、意見

- ・中学生や高校生にはJICAの話は難しすぎたのではないかな。
- ・JICAの仕事の内容よりも他の部分に時間を割くべきでは。
- ・目先の利益追求にとらわれず、長期的なプロジェクトとして成功を期待している。
- ・日本の木材をこれだけ買えば、何m²の熱帯雨林を伐らずにすむという、具体的にわかる形で示して欲しかった。またこれだけの地域が保全できたという形でわかる協力が必要ではないか。
- ・どのような方法・技術で生態系保全をおこなっていくのか具体的な施策が聞きたかった。
- ・JICAと人博共催というスタイルのシンポジウムを今後も続けて行って欲しい。
- ・JICAは必要性や重要性ばかりを訴えているが、地域住民が自ら進んで地域のことを考える、動くことが必要で、彼らの活動・意識が重要である。
- ・地域整備も必要だが、自然保護という観点から整備にあたって欲しい。
- ・国や県、JICAなどが表に出ない活動ができないものだろうか。何かと援助名が表に出てきて見苦しい。
- ・ボルネオの住民のために研究・資機材・人材の投資がまず必要である現状を考えれば、ボルネオで長く研究活動をおこなっている人博と、豊富な機材・人材を擁するJICAが、協力体制をとることは非常に有益と感じる。サバ州の多彩な機関と協力してやっていけるのではないかな。
- ・もう少し広報活動に力を入れてはどうか。

③その他

- ・地球環境関西フォーラムの冊子は立派すぎて内容に欠ける。税金や寄附金をもっと大切に使って欲しい。
- ・今回のシンポジウムで野生のオランウータンの話が聞けると思っていたが、あまり話題に上らず残念。
- ・今回はサバ州のみの話で、サラワク州やブルネイ、インドネシア領カリマンタンの話が希薄であった。広い範囲（ボルネオ島全体）で考えてみてはどうか。
- ・挨拶が長く感じた。(他2名)
- ・第二部の発表をもう少し長くして欲しかった。(他1名)

- 内容が盛りだくさんで、休憩も短く、時間配分にもう少し配慮をして欲しかった。(他5名)
- パネルディスカッションでは発表などしないで、討論をメインとして欲しい。
- パネルディスカッションでは強烈な個性を持った先生方の話が聞けて私自身の刺激になった。
- ジャングル体験スクールに参加した子供たちの発表は感動した。
- ジャングル体験スクールは素晴らしい事業だと思う。このような体験は子供たちや日本の将来にも大きく影響することだと思う。
- ジャングル体験スクールの大人版はないものだろうか。是非とも実施してほしい。
- ジャングル体験スクールの対象を児童だけでなく、中学生や高校生に広げてはどうか。
- ジャングル体験スクールの視点がボルネオに偏っているように思えた。もう少し国際的な視点で広く活動して欲しい。彼らには期待大である。
- 一つ一つのことを丁寧に説明した発表が多く非常に解りやすかった。
- 自分の知らないことばかりで、楽しく勉強させてもらった。
- 三木さんの話は大変面白かった。(他1名)